〈調査報告〉

琉球列島における魚毒漁についての報告

盛口　満

要　約

奄美大島および沖縄島奥において、魚毒漁を中心に、かつての暮らしの聞き取り調査を行った。奥において、集団魚毒漁やヒクと呼ばれるアイゴの稚魚漁においても魚毒漁がおこなわれていたことは、琉球列島の魚毒漁の中でも特異的な例であると考えられる。

キーワード：キーワード：魚毒漁、奄美大島、奥、スク（ヒク）

はじめに

数ある漁法のひとつに、植物に含まれる成分を水中に投じることによって魚を麻痺させるなどして捕獲する魚毒漁がある。魚毒漁は古くから世界各地で知られ（秋道　2008)、日本においても各地から記録されている（長沢　2006)。魚毒植物は地域によって使用される植物が異なり、日本本土からはサンショウを始め、オニグルミ、エゴノキ等の魚毒植物が報告されている（長沢　2006)。琉球列島においても、イジュやモッコクなどを中心として、本土とは異なったさまざまな魚毒植物が利用されてきた（盛口　投稿中)。琉球列島の魚毒漁は川及び海（イノーと呼ばれる浅い海やクムイと呼ばれる潮だまりなど）で行われたが、どのような植物をどのような場所でどのように使用するかについては、シマと呼ばれる集落ごとにも、大きな違いがある。しかし、戦後、魚毒漁は外来の栽培植物であるデリスや、青酸カリなどの化学薬品の使用が見られるようになるとともに環境への負荷が大きくなり、やがて法の整備もあって完全に見られなくなった。魚毒漁のみならず、琉球列島のシマにおける生業と関連した自然物を利用する文化は急速に忘れ去られつつある。同時に、シマの周囲に見られた人の影響を受けた自然（いわゆる里山）も、どのようなものであったか、わからなくなりつつある。今回、奄美大島と沖縄島において、かつて行われた魚毒漁について高齢の方から聞き取りを行うことができた。また、魚毒漁だけでなく、それと関わると思われる自然物利用についても若干の聞き取りを行った。

１・調査方法及び期間

奄美大島・瀬戸内町手安に在住の、井上昇さん（昭和 6 年生まれ）から、魚毒漁の聞き取りを行った（2014 年 7 月 4 日)。

また、沖縄島・国頭村奥に在住の、宮城安輝さん（昭和 3 年生まれ）及び、崎原栄秀さん（大正 14 年生まれ)、崎原トミさん（昭和 6 年生まれ)、そして奥出身で現在は那覇在住の宮城邦昌さん（昭和 23 年生まれ）の諸氏から、魚毒漁の聞き取りを行った（2014 年 6 月 10 日)。

２・調査結果

２－１：奄美大島・瀬戸内町手安　井上昇さんのお話

盛口：イジュを使った魚毒漁について教えてください。

井上：子どもの頃、先輩方や年寄りらが、イジュを使って魚を捕るのを見ました。捕ったのはウナギですね。イジュの皮を臼でつついて、くだいて袋につめて。やり方はシマジマで特徴があったと思うんです。手安では袋に詰めて……米俵みたいなのとか、キビナゴ捕りに使った目の細かい網のきれっぱしとかにイジュの皮をつめて、川の上流に持って行って、それを青年や子どもたちが足で踏んづけて。下の方で、ウナギのいる穴に毒が入り込むとウナギが酔っ払ったようにでてきます。子どもの頃の記憶です。沖にサンゴ礁があるところでは、海でも毒を使うと聞いていますが、ここでは海では使いません。それと住用の三太郎峠あたりとかではイジュが豊富ですが、瀬戸内のこのあたりはイジュの木は少ないんです。

盛口：集落全体ではなく、グループで使ったんですか？

井上：ここは見里（みざと）というのですが、ここの隣近所のおじさんで好きな人がいて、本土から親戚が返ってきたとか、豊年祭の前後の遊び日に、そうした暇なときに音頭をとるリーダーの人がいて、今日、ウナギをとって歓迎会をするよ……と声をかけてやりよったですよ。昔はそこいらの小川もコンクリ漬けではなくて石の護岸でしたから。小さな溝のようなところでも、ウナギがおって捕れたんです。これは私が子どもの頃、昭和10年代から20年代までの話です。そのあとは、電極を持ってというやり方になって、ひどいところでは青酸カリを使っていました。イジュを使ったのは、昭和のその頃までかと思います

盛口：デリスは使いましたか？

井上：デリスは同じころに使っていましたね。私はデリスの経験はありませんが。

盛口：山からの材木出しについて、教えてください。

井上：私の母の年代……明治37～38年生まれのＯさんのお父さんは、山仕事をしていて、家の材木……梁や桁やイヌ走りとかそうした材を出していました。イジュは家の材木として貴重品です。めったに使えないもの。ハーモモ（和名：モッコク）よりも珍重されました。珍しい材で虫もつかないと。これは注文に応じて材を出していました。貧乏人の家では松材とかでしたが。経済的に余裕のある方は、イジュ材を切り出してというのがあったんですが、そうざらには出せなかったと、この方から聞いたことがあります。このへんはイジュ自体が原木として使えるほど、生えていなかったんですね。

盛口：材は島外にも出しましたか？

井上：外貨獲得に材木を出していました。復帰後まで続いたんじゃないですかね。出したのはシイ材と松材と杉材で、建築材としてです。沖縄の焼け野原の第一次復興のバラック材として出したんです。

盛口：田んぼは手安にもありましたか？

井上：田んぼは古仁屋から手安に入るところの前に桟橋がありますが、その近くに限られた面積の田んぼがありました。ここは田下（たのしゃ）と呼んでいました。そこに一部の方々が田んぼを切り拓いて開いていました。中田（なはだ）という地名もありました。田んぼを作っていたのは集落内ではごく限られた人ですね。私の小さいころは、うちでも田んぼを作っていました

が、2畝ぐらいのものでした。タニシもドジョウも子どもの頃はいました。代掻きをやってならす。そうすると、夜、ウナギが田んぼの表面を這っていて、それをカンテラつけて捕りに行きました。

盛口：川のウナギと田んぼのウナギの違いはありますか？

井上：はい。いわゆるウナギと今、言っているのはタウナギと言っていました。川にいる大きなウナギはコーウナギです。田んぼのウナギは鋸を使って捕る人もいましたよ。私は昭和50年に与路島におりましたが、そのころの与路島は二毛作をしていました。7月収穫してすぐに植えつけて……と。で、夜、鋸を持ってウナギを捕りに行く人がやはりいましたね。あの辺はウシガエルも多くて、ウシガエルを食用にした人もいました。

盛口：ドジョウは食べましたか？

井上：ここら辺の人はドジョウを食べることはなかったですね。私なども食べた記憶はないですね。

盛口：ソテツの利用についても教えてください。

井上：戦前、私どもは駆り出されて農家の応援です。ソテツ葉を取って、葉を落として田んぼに踏み込んで肥料にした記憶があります。化学肥料の無い時代ですから。生徒動員で堆肥作りもしました。ソテツの実の毒抜きは、川が近くにある時は、川の水にさらしました。私の母や親戚がよくやりおったのは、各家に石を組んだ井戸があったので、その井戸の水を汲んで何回もかけて毒抜きをするというものです。月の晩、ばあちゃんたちと一緒にソテツの実を割って、子どもが殻をむきます。その実を臼でついて干して、目の粗い木綿の布に取り込んで、そこに井戸水を掛けます。ソテツの実を食べつくすと、主として終戦直後のことですが、ソテツの幹まで使いました。あと、キャッサバの栽培も盛んでした。これもデンプンを取ったり、そのまま食べたり、臼でついて餅替わりにしました。今の若い人はもうわからないでしょう。

2－2：沖縄島・国頭村奥　宮城安輝さんのお話

盛口：ササ（魚毒）漁のお話を教えてください。

宮城：終戦後から奥は財源が少ないから、個人に海を売った[注1]。売ったお金を区の予算にしたんですね。売る時は2か年ごしで。ササに使ったのは、もともとデリスや青酸カリなんてないから、イジュの皮をついて粉にして、それをばらまいて撹拌して。イジュの葉は牛やヤギにあげても死なないけれど……。戦後はデリスといってね、お茶の散布用として組合が入れて、それを使って撹拌して、魚に毒が回ったころに行って捕った。捕った魚はわけあいしないで、自分のものです。デリスの粉は、売店で売っていました。植えられていたデリスの玉（根）は使っていません。部落全体でブレーザサ[注2]をしたのは、楚洲の前のイノーを楚洲から買って。ブレーザサをする人は、申し込んで人を集めて、ザルに臼でついたイジュの皮を持ってくるようにといって、やりよった。申し込んだ家庭から二人ずつ参加します。もともとはイジュの皮を使っておったが、デリスが出てからはデリス。青酸カリを使ったのは一回だけです。海のブレーザサ、終戦後、2回か3回ぐらいやりよった。その最後の時、Tさんが区長のとき、役員5人が留置場に行っているんですよ。海から帰ってくるのを駐在が待ち構えておって。このとき、青酸カリ

を使いました。

盛口：デリスの使い方について、もう少し教えてください。

宮城：戦後使うようになったデリスは製品として売られていたものなので、イジュの皮のようにつかなくてもいいし、効き目も強いものです。小さいタマリで使うときは、砂に混ぜて撒きます。大きいところで使うときは、そのままばらまいて、かきまぜてから休憩をします。30分から1時間ほど休んだ後に魚を捕りにいきます。潮が引く前にタマリの周りにマニ（和名：クロツグ）の葉をさした紐を流しておくと、魚がタマリの中に留めておかれます。大きな海でササを使う場合も、マニの葉をさした紐で魚を留めます。これは一人、二人ではできません。マニの葉をさした紐を使うのは、潮が引く前です。

盛口：ワンクヮビーナ（和名：ルリハコベ）はササとして使いましたか？

宮城：ワンクヮビーナは家庭で使うもの。この草も、ヤギは食べます。

盛口：川でもブレーザサは行われていましたね？

宮城：川でするときは、上と下に分かれて、ウナギ目的でやりよった。戦前はわからんが、戦後は2回やりました。川のブレーザサも申込みですが、行かない人は少なかったです。一つの楽しみですから。あと、テッポウダマギー（和名：サンゴジュ）の葉をつついて、川でウナギを捕りよったですよ。これは個人でやるものです。

盛口：ササに使うイジュはどこに生えているものを使ったのですか？

宮城：ササに使うイジュは山に自然に生えているものを使います。材は建築材になります。他の木よりも虫がつかんと言って。イジュはモッコクにつぐ建材です。終戦後はイジュやシイの材をブタと交換しました。与論や伊平屋は建築資材がないので。逆に離島は戦争がなかったんでブタが残っていたんです。物々交換。ヤギも牛もそうして購入しました。イクサユーでは芋もブタも日本の兵隊がみんな食べよったですよ。それでも奥はタドーシがあったから避難しても助かりました。タドーシは稲を刈り取った後に田んぼに植える芋のことです。甘味があっておいしい芋です。

盛口：ヒク（アイゴの仲間の稚魚のこと）を捕るのにもササを使ったのですか？

宮城：ヒクはササで回して捕ったですよ。

盛口：集落に流れる川の魚をササを使って捕ったりしたと言うお話だったわけですが、水と暮らしとの関わりというと、デンプンを取る時にも水を使いますね。

宮城：タピオカ（和名：キャッサバ）は戦前からありました。クジウム（和名：クズウコン）は川のそばでアクを抜きました。そのままだと毒がある……と。すったものを水に入れて撹拌して沈殿させて。デンプンを取るための木の桶もありました。クジウムのデンプンは餅とか天ぷらにしました。

盛口：繊維として使う植物について教えてください。

宮城：ウー（和名：イトバショウ）は石灰分を入れてゆでてから、どろどろの部分を取り除いて繊維にします。ウーの畑は個人のもの。田んぼとウーの畑は個人のものです。ウーの畑はウーバティといって、川の両脇にありました。シュロの繊維も使います。シュロの縄はスルナーと言います。アダンのひげ(注3)、アダンナシもロープに使います。牛の鼻につける紐にも使います。アダンの紐は柔らかいですから。シュロで作ると、牛が痛いわけです。

２－３：沖縄島・国頭村奥　崎原栄秀さん、崎原トミさんのお話

（崎原栄秀さんからは、自宅の庭先で、海での魚毒漁のときに使用するという、マニの葉をロープに一定間隔ごとにさした“おどし”の作成を再現していただきつつ、話をうかがった）

盛口：マニの葉を使ったおどしはどのように使うのですか？

栄秀：100 メートルぐらいの長さで作ってかついでよ。潮が引く前に海に入れて。マニの葉は裏が真っ白だから、これが潮で動かされて、魚が外に出ないわけ。輪にしたものを担いで、泳いでいきよったよ。

盛口：海でのブレーザサのとき、この“おどし”でイノーの一部を囲うわけですね。海のブレーザサの様子を教えてください。

栄秀：ブレーザサで捕った魚はわけます。50 世帯なら 50 世帯で。イジュを使ったのは戦前のことですね。イジュの皮を臼でついて粉にして、ザルに入れて、一世帯 10 斤、20 斤と、各家庭に割り振って。この粉を作るのに一日かかります。午前中、山へ行って皮を取ってきて、午後、臼でついてと。皮はとってきて、すぐにつきます。4，5 日も干しておいたら、かえって硬くなってやりにくい。イジュは特にどこに生えているものを取るというきまりはありません。海のブレーザサは、アブシバレーの前にやって、捕った魚はアブシバレー（注４）の料理にしました。アブシバレーは午前中、品評会。1 時ぐらいから車座に座って、ねえさんたちは、モーヤー（踊り）。男は相撲。それから飲み会です。

盛口：テッポウダマギーもササとして使うことがあったのですね？

栄秀：テッポウダマギーは海では使わんかった。これは個人で、川でやるものです。川の真ん中に砂を盛り上げて、そこに葉っぱをおいて、棒でたたく。こんなふうに、山川（注５）でやるもの。下の方に囲いをつくるということはありません。ワンクゥビーナは海のちょっとしたタマリで使うものです。取ってきて、石でこすってからタマリに入れます。ただこれは大人の仕事じゃなくて、子どもの遊びのようなものですね。

盛口：ヒク漁でもササを使ったということですが。

栄秀：ヒクが寄ってくると言うと、朝の 5 時頃から海に行きます。イノーのタマリに入ってくるので、ササを入れて死なない前に捕ります。死んでしまうと、底に沈んでしまうので、ひとつひとつ拾い集めるのが大変。これは 6 月ごろのことです。ヒクがイノーに入って草を食べてしまったら、これはクサカミと言って、もうだめです。もっと大きく育った者はエーヌクゥと言いました。これもある場所の海藻を食べたものは食べると中毒するといいました。

トミ：ヒクはあまりたくさん捕ったら、竹のカゴにいれて並べて干してダシにしました。カーカスー（干し魚）です。屋根の上で太陽にあてて。ヒクがやってくるときは、真っ赤、真っ赤して、道みたいにして通りよったよ。これを 4、5 名ずつで組を作って捕って分け合いました。ピシ（リーフ）に来たらみんなで縄で泳ぎながらタマリに追い込んで、そうしたらササを少しずつ入れて、掬って。

栄秀：ササは加減していれんと、ヒクが死んでしまうから。こうして海でササを使うときは、ティル（カゴ）にウーの葉を敷いて、その中にササを入れました。

２－４：沖縄島・国頭村奥　宮城邦昌さんのお話

盛口：イジュやルリハコベ、サンゴジュなど、いろいろな植物をササとして使っていたのですね。

邦昌：あと、タバコの葉もササとして使いました。タバコの栽培、勝手にするのは禁じられていたが、じいさんたちは自分で吸う分は作っていたから。それを盗んできて、ちぎって潮だまりで使った。他はタバコの吸い殻を拾ったり。これはイヌジイという小さいタコを捕るため。泳いでいるのを見つけたら、そのまま捕れるんだが、穴に入ってしまったものを、タバコの葉で追い出して捕る。これはクサバー（ベラ類）を捕る時のエサ。魚釣りのエサを捕る為の手段なわけ。クサバー釣りは泳ぎながらするから、タコの脚をちぎって、一本ずつ口に入れといて、これを口でちぎってエサにする。腹が減ったら、そのまま食べてしまったり。足場があったら、ナイフでエサを切れるけど、泳ぎながら釣るから、口の中にエサをいれてあるわけ。クサバー捕りは夏の大潮のとき。奥の港の右側の海岸はリーフが浅くてうねりが入ってくるから危ない。西側がいいところ。ただしクサバー捕りの先輩たちは、それぞれ穴場を持っていて、西も東も関係ない。釣れないと１キロも２キロも泳いでいるし。

盛口：ルリハコベは子ども専用のササと聞きましたが。

邦昌：小さな子どもは、海に行って、最初は貝を拾う。そのうち、先輩が知恵をつける。ルリハコベを使って……と。で、小さい子が遊んでいるうちに、自分らは深みに行く。あんたらはここで遊べ……と言っておいて。海には女の人も一緒に行くけれど、年長の子どもは幼い子を見ていて、女の人は貝やタコ捕り。こんなふうに、子どもたちも、いくつになったら、これができるというハードルがくぎり、くぎりにあった。それを超えるときに喜びがある。５～６歳ぐらいまでがルリハコベを使う年齢。それ以上になると、魚釣りのエサが自分でつけられるようになる。

盛口：ヒクを捕る時にもササを使いましたね？

邦昌：イノーの中に石にひっついていたりすると、網で掬えない。石の隙間に入ったりとか。そこで、イジュの皮の粉を入れて、攪乱させる。そうして掬うわけ。イノーの中に入って藻を食べてしまったヒクはクサカミといって、これはもう塩漬けしても保存ができない。すぐに虫がわいたり、腐ったりしてしまう。クサカミがもっと大きくなったものは、エーヌクヮと言う。冬、ばあさんたちが夜に海にいって、これを捕ってきた。これは乾燥させてダシに使う。

盛口：個人で川でササを使った場合もあったのですか。

邦昌：ウナギがいるから。奥でも好きな人は個人で山によく行って、ウナギを捕っていた。そのおじいさんの孫が、僕の一期後輩で、彼はよくじいさんに連れていかれたって。

注１）奥では、魚毒漁にさまざまな種類があった。ここで言っているものは、ササ潮が引いた後にできるタマリ（潮だまり）での個人で行う魚毒漁の占有権をタマリごとに入札していたということ。

注２）奥の魚毒漁の特徴の一つは、ブレーザサと呼ばれる集落の構成員のほとんどが参加する漁がおこなわれていたこと。ブレーザサにも川でおこなわれるものと、海（隣集落の楚洲の前のイノーが使われた）でおこなわれるものがあった。

注３）アダンの気根のこと。

注４）田植えの後に、畔の草刈りや虫払いをして、豊作を祈願するもの。旧暦の４月中旬ごろに行われる（『沖縄大百科事典』）
注５）細い支流のこと

３・考察

奥はブレーザサと呼ばれる集団による魚毒漁がおこなわれていたのだが、琉球列島の島々の中でも、このような集団魚毒漁がおこなわれていた集落は、数少なく、ほかにはこれまで石垣島・白保の例が報告されているだけである（岩崎　1974）。白保の場合は、川による集団魚毒漁がおこなわれていたのだが、これはまた、雨乞いと関連した行事に伴って行われるものだった。集団漁の有無、雨乞いと関連するか否かといった違いが何に起因するか、今後、明らかにしていく必要があると考える。また、一般にスクと呼ばれることが多い、アイゴ類の稚魚漁は、琉球列島の各島で見られるものだが、このスク漁と魚毒漁が関係している例も、ほかに報告を聞かない。このように、奥の魚毒漁は琉球列島の魚毒漁の中でも特異な例であると考えられる。同時に、より視野を広く見れば、魚毒漁には多様性があり、その多様性が地域の自然及び、文化の多様性（生物文化多様性）を反映しているとも考えうる。今後、魚毒漁は琉球列島の生物文化多様性を解明するための一つの尺度となりうるのではないかという視点で、調査を続けていく必要があろう。

謝辞

奄美大島瀬戸内町在住の前田芳之さんには、話者である井上昇さんをご紹介いただいた。また沖縄島奥出身の宮城昌邦さん及び島田隆久さんには、奥における聞き取り調査の話者を紹介していただくとともに、調査についても様々なアドバイスをいただいた。記して感謝したい。

引用文献

岩崎卓爾　(1974)『岩崎卓爾一巻全集』　伝統と現代社
沖縄タイムス社　(1983)『沖縄大百科事典』
秋道智彌　(2008)「マメ科植物の魚毒漁―アジア・太平洋のマメ科デリス属を中心に」『Biostory』9：pp.72-82
長沢利明　(2006)「毒流し漁と漁毒植物」『西郊民俗』196：pp.1-14